

第2回 品川宿～川崎宿間

この間は品川の八ッ山橋交差点から国道と分かれ東品川商店街通り（旧東海道）を進み鈴が森の先から再び国道15号線に合流し六郷大橋を渡った川崎宿交流館までである。



歌川広重の東海道五十三次の内品川図（右図）に八ッ山橋から見た宿場入口の風景、海岸が描かれているから江戸時代はこの街道は海岸沿いであったということが判る。

品川宿は「江戸四宿」（東海道の品川宿、甲州街道の内藤新宿、中山道の板橋宿、奥州・日光道中の千住宿）のひとつで、参勤交代の大名行列の最重要ルートだった。この宿で大名たちは東海道の長旅の疲れを癒し、身支度を整えて江戸に入るのが習わしで大変賑わった。また、日本橋から2里と近かったので江戸市中からは御殿山の桜、海岸での潮干狩り等の観光客が訪れにぎわったところである。

品川からは現在の八ッ山橋から国道と分かれ左側の北品川商店街通りに入ると旧東海道の品川宿である。

八ッ山橋を渡って東品川商店街通りに入ると道幅も狭く、街づくりの努力もあり旧東海道を思わせる雰囲気が出てきた。

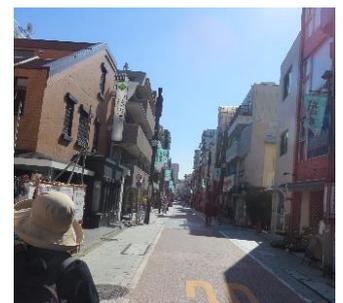
商店街を暫く進むと東海寺の前に問答河岸跡あり。

問答河岸跡

3代将軍家光が東海寺を訪れた帰りに沢庵和尚に將軍から「海近くして東（遠）海寺とはこれ如何に」と問われ、和尚は「大軍を率いても

東海道をあるく 第2回 (2016年10月26日)
品川～川崎 (約18km)

立ち寄り場所
JR品川中央改札口前出発(10:00)
⇒ ①八ッ山橋、御殿山跡
⇒ ②問答河岸跡⇒ ③土蔵相模跡
⇒ ④御殿山下台場跡⇒ ⑤利田神社
⇒ ⑥品川宿本陣跡⇒ ⑦荏原神社
⇒ ⑧品川宿問置場跡
⇒ ⑨品川宿寅目改所跡
⇒ ⑩遊場茶屋「釜屋」跡⇒ ⑪品川寺
⇒ ⑫海雲寺⇒ ⑬立会川 坂本龍馬像
⇒ ⑭浜川橋⇒ ⑮鈴ヶ森刑場跡
⇒ ⑯鐘井神社⇒ ⑰屋敷(平和島の「藤」)
⇒ ⑱梅屋敷跡⇒ ⑲六郷神社
⇒ ⑳六郷渡しの跡
⇒ ㉑川崎宿田中本陣跡・田中休息
⇒ ㉒東海道かわさき宿交流館(解散)
⇒ ㉓川崎駅 (10:00～16:45)



将(小)軍と言うが如き」と応えた故事から名付けられたという。

昔からこういう問答はあったのだ。

品川宿本陣跡

品川宿の大名・公家など身分の高い人だけが宿泊できる本陣、高山金右衛門宅 300 坪の敷地に 135 坪の建物があった。現在は聖蹟公園となっている。



本陣跡



問屋場跡
貫目改所跡

旅行者の荷物を運ぶ人馬や馬を交代する中継所の問屋場跡、運送する荷物を検査する役所の貫目改所跡等宿場を構成している用語が出てきて旧東海道の宿場の雰囲気が味わえるが、残念ながら石碑や掲示で知る。

標示はなかったが宿場内には武士が宿泊出来、空いている時は一般人も宿泊出来た脇本陣、宿場内の人の出入りを監視する見張り所見附などがあった。

この地を古地図で見ると昔は海岸線が入り組んでいて、その岬の先端に御殿山下台場跡があったが現在は埋め立てられてその様は判らないが訪ねてみた。

御殿山下台場跡

ペリー来航以来以来警護の意識が高まり時幕府は江戸を守るために品川沖に 11 のお台場を整備することにしたのだが第 4, 7, 8 は完成に至らずその代わりに陸続きのこの御殿山下に台場を造った。しかし実戦としては一度も発射されなかったという。現在は台場小学校となっている。



御殿山下台場



品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。



江戸八百八町地図

品川を古地図で探る東海道

品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。

品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。

品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。

品川宿には御殿山台場と浜川砲台が設けられていた。



荏原神社

ほんせんじ

品川寺：大同年間の創建の古刹で入口に江戸六地蔵の一つ地蔵

菩薩坐像（青銅製）がある。

江戸六地蔵とは

宝永五年（1708）江戸・深川の地蔵坊正元が江戸中から浄財を集め、旅の安全を願って江戸六か所の出入りに地蔵菩薩を建立したもの。

- 第一番 **品川寺**（品川・東海道）、
- 第二番 東禅寺（山谷・奥州街道）、
- 第三番 太宗寺（新宿・甲州街道）、
- 第四番 眞性寺（巣鴨・中山道）、
- 第五番 霊巖寺（深川・千葉街道）、
- 第六番 永代寺（深川・千葉街道）



品川寺

海雲寺：火と水の神の千躰荒神は台所の神様として江戸時代から親交を集めている。

本堂の大願成就納額と火消し纏絵の描かれた格天井（ごうてんじょう＝ケシマスの洒落）が見所。



海雲寺

坂本龍馬像が立会川駅付近にある。

嘉永6年（1863）黒船四隻によるペリー艦隊来航の折、**坂本龍馬**（1835～1867）は土佐藩の下屋敷の近くにあった**浜川砲台**の警護にあたる。当地は後に海運貿易の亀山社中の設立、薩長同盟の斡旋など、近代を切り拓いた龍馬が志を立てたゆかりの地である。



坂本龍馬像

龍馬像の直ぐ近くに立会川に架かる**浜川橋**がある。

浜川橋（泪橋）

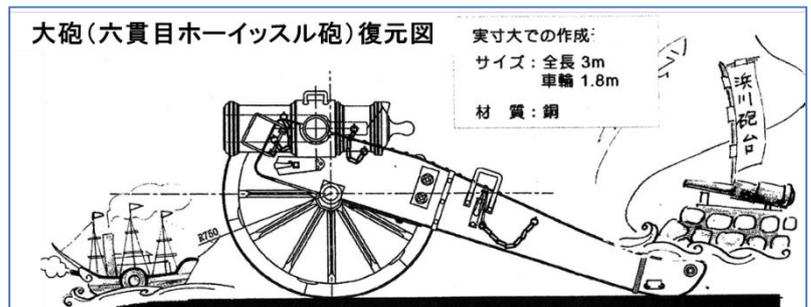
慶安4年（1651）品川にお仕置場（鈴ヶ森刑場）が設けられた。ここで処刑される罪人は裸馬に乗せられて江戸府内から刑場に護送されてきた。この時親族が密かに見送りに来てこの橋で共に涙を流しながら別れたという。この事から「泪橋」と呼ばれるようになったという。

立会川はその名の通り江戸罪人をこの川に架かる浜川橋から罪人を見送った所だったとは。



浜川橋

浜川沿いを少し下ると海岸側に**浜川砲台跡**があり、最近実寸大の大砲（6貫目ホイッスル砲）が復元され設置されている。



更に進むと**鈴ヶ森の刑場跡**がある。

鈴ヶ森の刑場：慶安四年（1651）設けられた刑場である。首洗い井戸やひげ題目の碑、火炙りに用いられた鉄柱の丸穴石、礎の木柱を建てた角穴石などが残っている。由比正雪の乱の首謀者・丸橋忠弥や八百屋お七等がここで処刑されている。



鈴ヶ森を出て国道15号線（第1京浜）と合流、そのまま川崎に向かう。ここから梅屋敷までは単調な国道をひたすら歩くことになる。

江戸時代も途中の**蒲田梅屋敷**まで単調な道だったに違いない。



蒲田梅屋敷には文政3年（1820）頃「和中散」という道中薬を売っていた店舗が数軒あったが、その1軒を山本忠左衛門が買受け、梅や椿を植えた庭園と休み茶屋を造った。文人や行楽客たちが集まるようになり「**蒲田梅屋敷**」は江戸の名所となった。

以降は多摩川の六郷の渡し跡まで約3 km。国道15号の車の騒音と暑さにめげずひたすら歩くと多摩川手前の左側に**六郷神社**がある。

六郷神社は源頼義・義家父子がこの地の大杉に武運長久を祈った所、前九年の役に勝利したので石清水八幡の分霊を勧請し六郷神社を創建したという。その後源頼朝はじめ徳川家康からも色々と寄進を受けている。



六郷の渡し跡

慶長五年（1600）架橋されたが元禄元年（1688）洪水で流失、以来架橋されず舟渡しだったが、明治七年（1874）架橋された。渡船は大正十四年（1925）架橋されるまで240年間続いた。

多摩川を渡った所から国道を外れ左の旧東海道を進むと約1 km位の所が**川崎宿**である。**田中本陣跡**の掲示あり。

田中本陣は、寛永5年（1628）に本陣となった、本陣当主の**田中休愚**が8代将軍吉宗の頃幕府の持つ六郷川渡船の運営を川崎宿の請負とすることに成功し川崎宿の財政を立て直した。これが享保の改革を進めていた吉宗に認められ幕府に登用され晩年は代官となった。

川崎宿に三つあったといわれる本陣の中で、最も古い。田中本陣の場所が最も東、すなわち江戸に近い「下（しも）の本陣」ともいわれ、建坪は231坪（762㎡）あった。

本陣は参勤交代の導入により、多くの大名が街道を旅するようになるとともに栄えたが、



江戸後期には、大名家の財政難や参勤交代の緩和により、衰えが目立った。

安政4年(1857)、アメリカ駐日総領事ハリスが、田中本陣の荒廃ぶりを見て、宿を万年屋に代えたとある。

300年弱も続いた江戸時代参勤交代も時代の流れで変わりそれに対応した本陣の経営にも苦勞していた様が見える。

田中本陣跡のすぐ先に今回の終点である川崎宿交流館がある。

この交流館が発刊している「広重東海道五拾三次」は広重東海道五十三次の内の55枚の解説付き図が収録されており東海道五十三次を歩こうという人にはお勧めである。



この回は初回の銀ブラとは違い、宿場・宿場間の街道歩きと東海道歩きの雰囲気を楽しむ。

品川宿 旧道生かし 街保つ

今回も年代順に整理してみた。

第2回（品川～川崎）の東海道筋訪問先の事象年表

859	貞観元年	磐井神社を「武蔵国従五位下磐井神社官社に列す」とあり、この神社を武蔵国の八幡社の総社に定められた。別名、鈴森八幡宮ともよばれた。磐井の井戸あり、万病に効く薬水とされ、飲む人の心が正しければ清水に、心邪（よこしま）なら塩水になるといわれた。
1057	天喜五年	源頼義・義家の父子がこの地の大杉に源氏の白旗を掲げて軍勢をつのり、石清水八幡に武運長久を祈った所、士気大いにふるい前九年の役に勝利したので、その分霊を勧請して、六郷神社を創建した。
1189	文治5年	源頼朝も奥州征伐の戦勝を六郷神社祈っている。
1191	建久2年	源頼朝は梶原景時に命じて六郷神社の社殿を造営している。境内にある大きな手水石は、その時頼朝が寄進したものである。
1600	慶長5年	六郷橋が架橋された。
1628	寛永5年	川崎宿田中本陣が設置された。 三つあったといわれる川崎宿の本陣の中で最も古いものである。
1651	慶安4年	鈴ヶ森刑場が設けられた。 油比正雪の乱の首謀者・丸橋忠弥や八百屋お七、天一坊、白井権八、白木屋お駒などがここで処刑された。
1657	明暦3年	品川寺の梵鐘が铸造された。 周囲に家康・秀忠・家光3将軍の諡号（しごう＝おくり名）と六観音像が浮き彫りにされている。
1688	元禄元年	六郷橋が洪水により流出、以来架橋されず六郷の渡しとなった。 明治7年（1874）架橋されたが、六郷の渡しは大正14年（1925）の鉄の橋が架橋されるまで240年間続いた。
1702	元禄15年	御殿山の御殿は焼失。その後8代将軍・吉宗が桜を植えて江戸庶民に開放し花見の名所となった。
1708	宝永5年	江戸・深川の地藏坊正元が江戸中から浄財を集め、旅の安全を願って江戸六カ所の出入りに地藏菩薩を建立。これが江戸六地藏である。
1798	寛政10年	天王洲の浅瀬に乗り上げた鯨（長さ16m）を漁師が捕まえた。 この鯨は浜御殿まで運ばれ、11代将軍家斉の目にも触れ、歌も詠まれている。その後鯨は解体され、骨は洲崎弁天（現：利田神社）境内に埋められた。この鯨を供養しての鯨塚がある。
1820	文政3年	「和中散」という有名な道中薬を売っていた薬店舗が数軒あり、この中の一つを山本忠佐衛門が薬屋の株と共に家屋敷全てを買い受け、梅や椿を植え庭園と休み茶屋を造った。これが「蒲田梅屋敷」で、文人や行楽客・旅人達が集まり江戸の名所となった。
1862	文久2年	品川御殿山への英国公使館建設に際して、攘夷論者の高杉晋作や久坂玄端らはこの土蔵相模で密談を凝らす。同年12月焼き討ちを実行。

1863	嘉永6年	ペリーが4隻の軍艦（黒船）を率いて浦賀に来航した。 幕府は江戸を守るため品川から深川洲崎にかけて11の台場をつくることにした。第1, 2, 3, 5, 6は完成させたが第4, 7は途中で工事中止、残りは着工に至らなかった。その代り5角形の砲台を作ることになった。 御殿山下台場 はその一つである。
1863	嘉永6年	黒船四隻によるペリー艦隊来航の折、 坂本龍馬 （1835～1867）は土佐藩の下屋敷の近くにあった浜川砲台の警護にあたる。当地（立会川）は後に海運貿易の亀山社中の設立、薩長同盟の斡旋など、近代を切り拓いた龍馬が志を立てたゆかりの地と云える。
1857	安政4年	アメリカ駐日総領事ハリスが、 田中本陣 の荒廃ぶりを見て、宿を万年屋に代えたとある。
1868	明治元年	鳥羽伏見の戦いから関東に引き上げてきた土方歳三を始めとする新選組隊士も一時「 釜屋 」に投宿した。釜屋は一般的に旅籠より安価であったため、繁盛したといわれ、殊に釜屋は本陣同様の門構えで、連日幕府関係者が宿泊したと謂われている。
1867	慶応3年	品川寺の梵鐘 をパリ万国博に出品した。 その後、行方不明であったが大正8年、スイスのジュネーブ市の美術館で発見され、昭和5年に返還された。「洋行帰りの梵鐘」と呼ばれている。